

第一章…激戦後のキーストーン、限界突破の誘惑

カロス地方、シヤラシティから少し離れた山間の道。日が傾き始めたその時間、私たちは修行という名の逃避行の末、やっと今日の目的地にたどり着いた。

コルニは全身を覆うベンチコートを脱ぎ捨て、いつものスポーティーな衣装——虹色のバ
ンダナにツーピース、そして全身に数珠繋ぎに巻きつけた大量のメガストーン付き装飾品
——姿で、軽やかに息を吐いた。彼女の衣装は、その動きに合わせて装飾品がカチャカチャ
と音を立てる。

「はーっ、疲れたあ！あたしのルカリオたちとの特訓、今回もキツかったでしょ？でも、勝
つために必要、なんてね！」

コルニはそう言って、腕にギュッと抱きついてきた。その抱擁は、ジムリーダーとしての
力強さと、継承者としての熱い情熱、そして一人の女性としての、抑えきれない甘さが混
ざり合っている。彼女の胸は、腕に押しつけられるたびに、その豊かな質量を主張し、心

を乱した。

「ああ、キツかった。でも、それがコルニの魅力でもあるだろ。ルカリオみたいに熱い」

「んふふ、そう？あたしの熱意、ちゃんと伝わってるんだね」

彼女は身体を離れたが、その瞳は期待に満ちてキラキラと輝いている。金色のトライタールが、夕陽を浴びてより一層鮮やかに見えた。

たどり着いたのは、ひっそりとした古風な温泉宿。扉をくぐると、静寂と木造りの温もりが私たちを包み込んだ。

「ねえ、見て！この雰囲気、すごくいい！もう修行のことなんて忘れちゃお。今日はあなたのための、特別なメガシンカの日なんだから」

コルニは声をひそめ、耳元で囁いた。その甘い吐息が、夕方の火照った肌をさらに熱くさ

せる。

「仲居さんに案内され、二人のためだけに用意された角部屋へ。部屋に入ると、コルニは真っ先に俺を振り返った。

「ね、競争しよ？」

「競争？」

「どっちが先に、この服を脱げるか。もちろん、罰ゲーム付き。負けた方は、今夜のあたしのキーストーンを、好きなように使っていい権利を失うの。なんてね！」

コルニはあっという間に装飾品とツーピースを脱ぎ捨てた。全身に巻きつけていた虹色のバンダナや数珠が床に散らばり、彼女の白い肌と、その常識外れの豊満な胸が露わになる。

「ふふっ、あたしの勝ち！ やっぱり、あたしの方がアツいね。さあ、次は…浴衣だよ」

彼女の身体つきは浴衣という和装すら、セクシーな衣装に変えてしまう。紐を締めたはずの胸元は、そのあまりの大きさをゆえに膨らみが強調され、深い谷間と、温泉で火照り始めている白い肌が、隠しきれずに露呈していた。

「さつきから、見てるでしょ？あたしのこと、ずっと」

彼女は浴衣の襟元を掴み、顔を覗き込むように近づいてきた。鼻腔に、ほのかな石鹼と彼女自身の甘い体臭が混ざった香りが届く。

「この浴衣の下には、ジムリーダーでも、継承者でもない、あたしがいるんだよ。この熱、誰よりも先に感じてほしい。ね？」

彼女の瞳は潤み、欲望に染まっていた。俺はコルニの浴衣の襟元に手をかけ、少し強引に引き寄せる。



「う、ん……っ」

彼女の甘い吐息が、唇に触れる。コルニは抵抗するどころか、さらに身を預けてきた。湯上がり前の火照った肌と肌が触れ合う瞬間、体温が一気に上昇する。

「……はあっ」

コルニは首に腕を回し、身体を密着させた。浴衣越しにも、彼女の熱と、胸元の柔らかな感触が伝わってくる。彼女は目をつむり、全ての感情を吐息に乗せるように、甘く、深く息を吐き出した。

「もう……待てない。ね、温泉、行こう。この熱、湯けむりでどうなっちゃうか、試したい。なんてね！」

最後の言葉は、興奮のあまり漏れた熱い息のようだった。コルニは乱れた浴衣のまま、手を引いて立ち上がった。

「さあ、秘められた進化は、湯けむりの中で始まるよ。逃げちゃダメだからね」

—————

第10章…キーストーンの響きと秘密の約束

乱れた浴衣のまま部屋を飛び出したあたしは、高揚感で胸が張り裂けそうだった。廊下は静かで、私たちの熱い息遣いだけが響く。

「ねえ、急いで！こんなに熱いあたしのキーストーン、早く解放しなきゃ！」

湯けむりが立ち込める露天風呂の入り口にたどり着いた瞬間、その熱気が身体を包み込んだ。貸し切り状態の岩風呂だ。

「貸し切りだ！やった！あたし、運も持ってるんだから。なんてね！」



コルニはためらいなく浴衣の紐を解いた。

サッと肌蹴る浴衣。中から現れたのは、白い肌と、溢れんばかりに盛り上がった胸。

「見て！この身体、どう？かくとうタイプとして鍛えたご褒美！」

彼女は両手で自分の胸をグッと持ち上げ、誇らしげに見せつける。

「あたし、これ、すごく気に入ってるんだ。すごいパワー、メガシンカみたいでしょ？」

コルニは軽やかなステップで岩風呂に足を踏み入れた。湯船に浸かることで水面が押し上げられ、彼女の豊かな胸はさらに際立った。

「あー、気持ちいい……っ。でも、湯よりもっと熱いのが、ここにあるよ」

湯船の中では、服の隔たりも、空間の隔たりもない。肌と肌が、直接、密着する。

「んんっ……っ！」

コルニの吐息は甘く、湯気に溶け込んでいく。俺の腕に回された彼女の脚は、驚くほど滑らかで柔らかかった。

「ねえ、もつと近くに来て。あたし、もつとキーストーンを共鳴させたいの。だって、熱が、あたしのメガシンカの鍵なんだもん」

彼女は湯船の中で、体をよじらせ、俺の胸にその全てを押しつけてきた。胸の柔らかさと、湯の圧力が相まって、感覚は研ぎ澄まされる。

「はあっ、ふう……っ」

湯けむりの中で、コルニは小さな悲鳴のような、甘い嬌声を上げる。その声は俺の耳には

鮮明に響いた。

「大丈夫、誰も見てない。それに、誰かに見つかるスリルも、あたしは好き。だって、あたってジムリーダーでしょ？普通の女の子じゃ物足りないの。なんてね！」

湯けむりの中で、キスを交わす。温泉の熱と、彼女の体温と、情熱が混ざり合い、呼吸が乱れる。

「んんっ、あ……っっ」

彼女の甘い吐息が、俺の口の中に流れ込んでくる。湯船の中、濡れた肌の上を滑る手は、もはや理性を保つことを許さない。

コルニは体を離し、大きく息を吸い込んだ。その胸が上下する様子は、湯気の中でもはつきりとわかった。



「はあ、ふう……っ。もう、だめ。この湯、熱すぎる。あたしの熱も、もう限界突破だよ」
彼女は蕩けるような瞳で俺を見つめた。

「わかってるでしょ？あたし、秘密の進化の続き、誰もいないベッドの上で試したい。こんなところで終わるなんて、ルカリオたちに顔向けできないよ」

コルニはそう言って、湯船から濡れた体を持ち上げた。

「さあ、キーストーンを、もつと深く、奥に響かせる番だよ」

第〇〇章…メガな鼓動、キーストーンの共鳴

露天風呂からの帰り道、湯けむりの中で熱く交わした視線と吐息の余韻が、二人の身体を

支配していた。部屋に戻るなり、コルニはタオルすら適当に床に放り投げた。

「はあ……もう、我慢できない！湯船でこんなにアツくなっちゃうなんて、あたしって変態かな？なんてね！」

彼女はそう言いながら、無防備な身体のまま、俺に飛びついてきた。その勢いで、俺の背中は壁に軽く打ち付けられる。

「んんっ……！」

重なる唇。さっきの温泉でのキスよりもずっと深く、切実なキスだった。湯気の中で抑えきれなかった全ての感情が、この瞬間に爆発する。

「はあ……んん……ふっ……っ」

彼女の鍛え上げられた腕が、俺の首にきつく巻き付く。ジムリーダーとしての力強さが、今

はただ、俺への独占欲として發揮されていた。

キスが途切れると、コルニは額を俺の胸に押し付け、甘い声で囁いた。

「もう……だめ……息、できない……でも、これでいいの。こうされると、あたし、最強になった気分。あたしの全てが、反応してる」

そして、彼女は再び、メガシンカ級の豊満さを、遠慮なく俺の腕の中に押しつけてきた。

「ね……触って。あたし、指先で、あたしのキーストーンがどうなるか、試したいんだもん」
恐る恐る、その膨らみに触れる。

「あ、っ……!!」

コルニの甘い喘ぎ声が、部屋の空気を震わせた。彼女の身体はピクリと大きく震え、その

体温はさらに上昇したのがわかる。

「やだ、すごい……なんて……？」

彼女の胸の中で、心臓が激しく、速く脈打っている。その鼓動は、俺の指先にまで伝わってきた。

「あたし、本当にこれ、気に入ってるんだ。ジムリーダーのあたしを支える、大切な力。でも、触れると、ただの最強のあたしになっちゃう……」

俺の指が彼女の肌を滑るたびに、コルニの身体は跳ね、彼女の口からは堰を切ったように甘い吐息と喘ぎ声がこぼれ続ける。

「ふ、う……はあっ……んん……っ」

「ねえ、すごすぎ……あたしの限界突破は、いつも連れてくるんだ。もう、全身がインフラ

イト状態だよ……」

「コルニは、全身を俺に預け、力を抜いた。俺は彼女の火照った耳元に、熱い吐息を吹きかける。」

「ねえ、コルニ。まだ終わりじゃないだろ？もっと、進化の続きを見せてくれ」

彼女はゆっくりと顔を上げ、潤んだ瞳で俺を見つめた。

「もちろん……！このメガシンカの鍵は、誰にも渡さないんだから。なんてね！」

「コルニは熱い息を漏らしながら、俺の服を剥ぎ取るように乱暴に引き寄せた。二人の間に、もう何も隔てるものはない。」

—————



第4章…究極進化の甘い雫、キーストーンに捧げる誓い

服を脱ぎ捨て、私たちは一つの熱い塊となった。前章での熱烈な愛の交歓は、もはや止まるところを知らなかった。

「すごいよ……もう、全身が震えちゃって……」

コルニは背中をベッドのシーツに沈ませ、その大きな瞳を潤ませながら俺を見つめた。彼女のメガシンカ級の胸が、大きく上下するたび、生命力に満ちた鼓動が聞こえるようだ。

「ね、早く……最強の力で、あたしをメガシンカさせて……！」

俺は、その白く、豊満な胸に顔を埋めた。コルニの体温、石鹸と汗が混ざった甘い匂い、そして胸の柔らかさが、五感を全て支配する。

「んんっ……ああ……っ」



コルニの甘い喘ぎ声が、俺の耳元で響く。俺は敬意と愛着を込めて、その膨らみ全体にキスを落としていった。

「や、だあ……そこ……っ。ねえ、キス、すごく深い……あたしのキーストーンが、ドクドクしてるよ……」

彼女の胸元には、ジムリーダーとしての誇りと、一人の女性としての愛着が詰まっている。その膨らみに唇を這わせ、深く、熱烈に吸い付く。彼女の豊かな胸が、まるで俺の愛情を注ぎ込む器であるかのように、全身の力を吸い込んでいるのが分かった。

「ふう……っ！あ……んん……っ！ねえ、すごい、これ……」

コルニの喘ぎ声は、言葉にならない甘い音へと変わっていく。

「まるで……全部、飲まれちゃうみたい……でも、気持ちいい。すごく……満たされてい

く……」

俺は彼女のその宝物を両手で包み込み、再び熱烈なキスを贈る。

「はあ……ふう……っ！あたし、もうだめ……。熱が、あたしの全部を溶かしちゃう……」

コルニは身をよじらせ、ついに耐えきれないほどの甘い悲鳴を上げた。

「ね、お願い……もう……！早く、メガシンカの本当の続きを見せて……！あたし、もう、限界……力が欲しい……！」

彼女の無邪気な熱意と、限界を迎えた情欲が混ざり合い、俺を求めてやまない。コルニは身体を引き寄せ、熱い唇を重ねた。



第4章…永遠に続くキーストーンの絆

服を脱ぎ捨て、私たちは一つの熱い塊となった。コルニの体は、俺の熱を求めて激しく疼き、その無邪気な瞳には、純粹な愛と官能だけが満ちている。

「最強の力で、あたしをメガシンカさせて……！」

彼女はシーツを強く掴み、蕩けた声で俺を求めた。

深い融合の瞬間、コルニの身体から、かつてないほどの激しい喘ぎ声がほとばしった。

「ああ……っ！んんん……っ！すご……っ！」

彼女は全身の力を失い、俺の腕の中で大きく息を吸い込んだ。

「はあ……ふう……っ！入った……キーストーンが、あたしの奥で、激しく共鳴してる……！」

俺は彼女の無邪気で熱い願いに応え、その奥深くに全身の愛情を注ぎ込んでいった。

コルニの喘ぎ声は波のように押し寄せ、次第に途切れ途切れの、小さな、切実な音へと変わっていく。

「ふ、っ……んん……あ……っ、やあ……っ」

彼女は両手で俺の背中に爪を立て、まるでルカリオがだいすきホールドで離さないかのようになり、その身体をしっかりと俺に絡ませた。

俺は彼女の濡れた唇に、いっぱいキスを贈った。

「んん……！ふっ……はあ……キス……あまあい……」

絶頂へと向かう激しい共鳴の最中、コルニの身体はさらに硬直し、彼女の瞳は喜びの涙で

濡れた。

「ああ……っ！だめ……！そこ……っ……」

そして、全身を駆け巡る激しい電流と共に、彼女は大きく、最高の歓喜の音を上げた。

俺は、彼女の最高の瞬間と共に、身体の奥底から込み上げるすべての愛と熱意を、彼女の奥深くへと捧げた。コルニの体内で、熱いエネルギーが弾け、融合する感覚。

主人公は、彼女の中で満たされた。

しばらくの間、二人は激しい息遣いを繰り返しながら、抱きしめ合ったまま動けなかった。

「はあ……はあ……っ……」

コルニは、俺の胸に顔を埋め、力を出し尽くしたかのように小さな声で囁いた。

「すごい……これが、究極の進化……ね……。こんなの、ルカリオたちには見せられない……
なんてね！」

俺が彼女の汗で濡れた髪をそつと撫でると、コルニは満足げに笑った。

「ねえ、あたしのキーストーンは、もう、隣でしか輝けないよ。ジムリーダーのあたし、継承者のあたし、全部ひっくるめて、全部……」

彼女は言葉を途中で止め、顔を上げて熱いキスを贈ってきた。そのキスは、永遠の誓いのようなキスだった。

—————

エピローグ…アフターメガシンカ…最高の目覚め



窓の外から差し込む朝日は、障子越しに優しく拡散され、昨夜の嵐のような情熱を静かに照らしていた。

俺は、重い、けれど極上の温かさに包まれて目覚めた。視線を向けると、そこには、俺の身体に完璧に絡みつき、深く眠り込んでいるコルニの姿。彼女こそが、俺が最も求めていた究極のだいすきホールの使い手だ。

「んん……」

小さく甘い吐息が、俺の首筋にかかる。彼女の豊満な胸は、朝の光を受けてさらに柔らかく見え、俺の胸にびったりと押し付けられていた。

「はあ……ふう……っ」

彼女の寝息は、昨夜の激しい喘ぎ声とは違い、穏やかで満たされた音だったが、それでも十分に俺の理性を揺さぶる。



「……おはよう」

俺が動いた気配に、コルニは目を覚ました。金色のトライテールは乱れ、瞳はまだ眠たげだが、その表情は極上の幸福に満ちている。

「ああ……っ！なんて、こんなに気持ちいいの、あたし！」

彼女は自分の身体を軽くよじり、シーツの上で全身を伸ばした。その無防備な仕草ひとつひとつが、尋常ではない色気を放っている。そして、俺に対するホールドを一切緩めない。

「ねえ、匂い……昨日よりも、もっと好きになってる！あたし、もう離れられないよ！このだいすきホールド、一晩中やってたんだからね！」

コルニは屈託のない笑顔でそう言って、俺の顎先に、甘く湿ったキスを落としてきた。



「チユツ……ふふっ、なんてね！でも、マジ。だって、昨日の夜、くれたメガシンカ、最高だったんだもん！」

彼女の無邪気なテンションは朝から限界突破だ。俺の首に腕を回し、再び熱烈なキスを求めてくる。

「ねえ、まだ、共鳴の続きしたい……。ほら、まだここが、キーストーンみたいに、熱いの……」

そう言いながら、彼女は自分の胸に俺の手を引き寄せた。その弾力と温もりは、夜明けの冷たい空気を吹き飛ばすほどの情熱を帯びている。

「ふ、う……んんっ……。ああ……。ダメだよ……。朝から、こんなにアツくさせちゃ……」

彼女の喘ぎ声と甘い吐息は、昨夜の記憶を鮮明に蘇らせる。



「でも、気持ちいいから、やめないよ！指先、もう、ルカリオの波動みたいに、あたしの奥まで届いちゃうんだもん……」

コルニは俺の愛撫に応え、全身を反らせながら、喜びの声を上げる。

「ねえ、まだ欲しがってるんでしょ？この究極のプロポジションで、朝からもつかい、激戦を挑んであげる！なんてね！」

彼女はキラキラとした瞳で俺を見つめ、無邪気な挑戦状を叩きつけてきた。

俺は、この愛らしく、強く、そして何よりも熱い彼女を再び抱きしめ、二度目の夜明けを迎えるための、甘いキスを交わした。

この旅はまだ終わらない。コルニと俺のキーストーンの絆は、永遠に輝き続けるだろう。

く完く

